多満棋

三編

へ13
2920
3

へ 13
2920
3

昭和九年
七月六日
購求

七拾号

玉はばたきの三編の序

龍の子の金かんの玉と称し俗用はた

凡まと山人が前日乃草稿翻刻なれ

古事の偽作越ぐとも清の金言の古今

ともなるべき戯作の親玉なまの北

雲国輝斎いとの世間

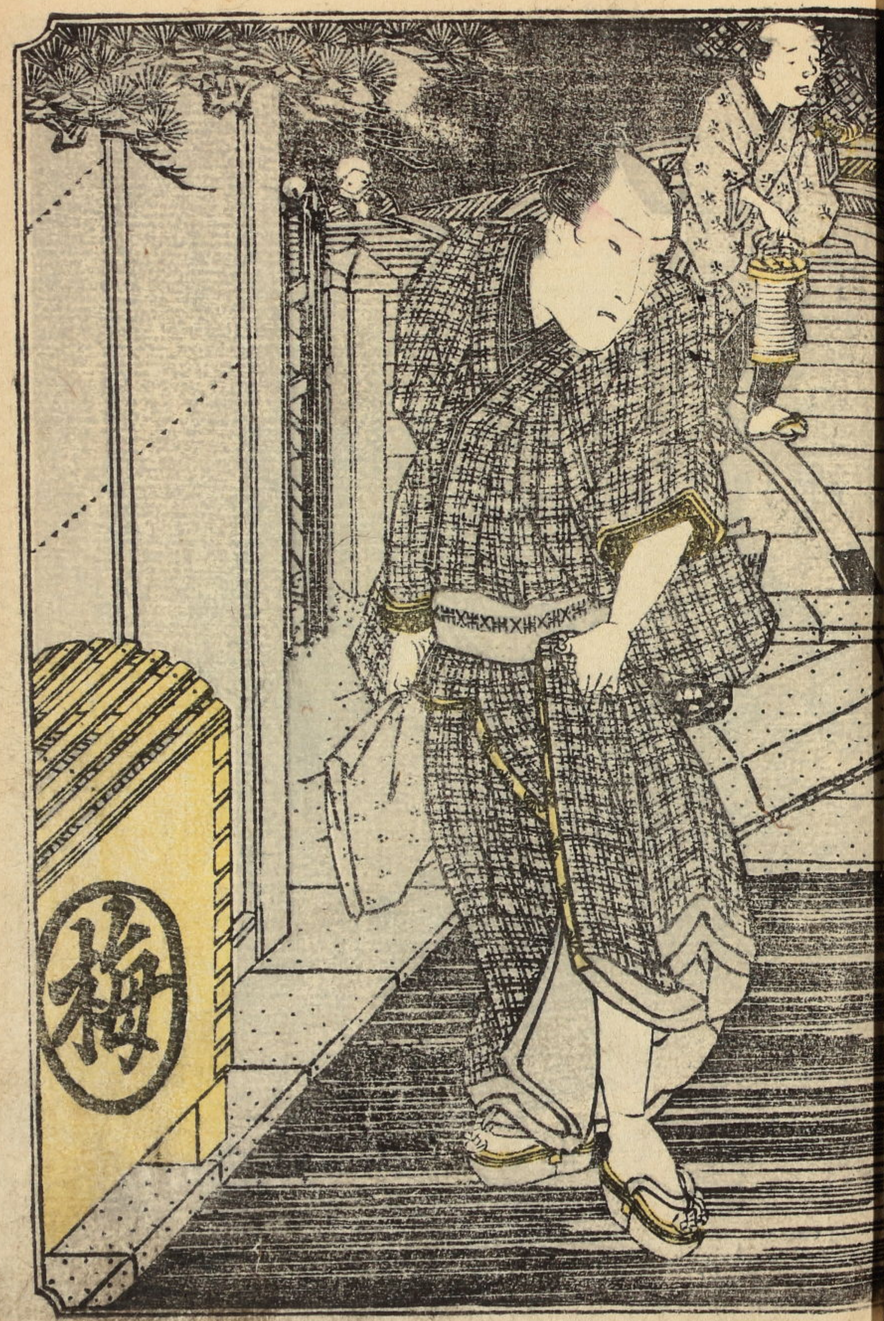
かゝるまゝに王羲之入道の
教を傳授さるゝ類あるべきにあらず
他の聽は作りでは有のく作者
おのゝ言人めいたるのみにあらず
もと法の風あるべきものと雲散
さまかたちなるべし近代人はかしこ稱ふ

一流をもつて其糟粕をなめて新
をふ流りまゝに為の運
をのまゝにて新著の師匠の古くも文句
眞似に言甲斐なきの高人さへも書れ
ひ調に乗て筆すゝ文字へ一体を
トヽ一さんどを極まて成の教を書し

一茅屋自構自炊あるじぶや
源氏の薫を取手ぶり光彦文をもて
作ちゝ言聽らまて小比をゝ
玉椿のもとぶ備ふ

東都狂川亭の川き

狂仙亭春笑誌


梅

川波屋
方壺堂

京物やあつらへの所をかりて春
ゆるるもの丹誠の柳うゑ
傳ひうでぬきてかりうゑもの爾

仙花
春笑
玉枝

孝女貞婦玉川伝　喜三編巻之上

江戸　爲永春水著

第十三回

[illegible]

やうて実田の薬師へ日参の寝を注くまを迷ひ惜しせ物を
落して文よう非人ふ苦しめらるを続ふ惜しき
頼みこる甲斐なるを訪ねふ仙されどもその男ひが病しるゆく
脈ろ老き場へ失せきくふ探へ京別荘ふ保養の大家の息子
二個の情懸ふ妙艶せこを風呂ふ入り下女の三名ふ彼
息子の衣服を仮ふの私うしさ座しふ生て世活をなるこ
袴をいふ入口の内最久ゆうしき安ろう
○二編月下の寒十一回自ふ赤こうる福岩の辰丁子屋

和十の持ちまりしをいふ小倉山の閑扇が編とるこをあ
ちき閑と思うれど又絵てるを京とハりよびさそ重
鄙寄くの閑扇の地紙を戯ふお濱ふ持せて三曉
お宝和十都合四人連注春亭ふ遊び俄の風刻ふ
閑扇の絵紙を使ちふさき御ふ拾ひ集そ帰ら
新弟別るふ酒肴探び居る客の中ふ濱を意
初うく仕別歴の息子宝ふ子ふ動こそ
自れ[illegible]刑猪[illegible]び秋光竜猿縁の弟子[illegible]

定賀と呼び温順生質うるはしく宿世の因縁ゆゑ色
好みの性はかしもうるはしふお場を見初めて深く慕ひ
その在家を探ねて尋ねる後の便りもと小倉山の閑房
塗を塗るかさね汚春亭より帰りてまづ所縁と秘蔵
とうるはしきを和らひうるお場ふ物語けまばお場ハ定
め助の決をよくく看るふ実ふ本須汚春亭ふて行ふ
ゆくゆくはきの男のこの男ひて見る皇子のうけまばまを
聞て有るくもまづうくく又藤ハしき仏の初て貴初物裏

うくて白赤ふも暫時言葉もなうしぶ四隅を見れば
先刻とうりゆゆも鈴ふ帯もいらく行くう新も見へぬ此
時統ふ貝養ていや初更ふ近くなりは
〈ヨヤモウ遅くなりましたう私ハモウおいとまをいたしまして
明日またまたふ稽古わるりませう　宅〈ハニぎりで遅くなるこころう
アヲ　ふ乳と安堵ておなるそうて出来の家程をおるるふ洗ハ
せこのぶまづ乾らるひうらるるきまひまそ衣服のまくてハ
男の衣服ぞうら他人ぶ看て笑ふ　ぞらふトのうまてお場ハ

父母（ヨヤホ）に左様でござるまうしまま新八放父とつまされ
ましてうらめいの様にくうまませうトうの毒そのよ賞義の用
情をあまして宮〳〵助宮（アノウ）お兼お家できぞおめんじで
お在ざらふーお兼もさやく〳〵家人帰りうろうろけまどもま
兼のうるさうおかひくうでいろ〳〵行まるハョそれつて考を
頼んで事せても上様の先刻の数が悪しくて付辺の材類
つて居て白徒仲ゑるが大勢結伏をしてうらまとうくまを彩
宮早不退ざらふと思ハョト怖威の洞よ稲のうの沿れ
難を我とおもひ出ー途方ふくまー手所へ鉄を弟八を出
鉄（若旦那）あまりうさものてどざるまして
ハの吉文さ　鉄（エナニサ）ひ腰を逆ら世を半ばくるうまして
（十二ホまる兵）
まひとぞんじまーてふ駕伝絵面を彩みふ兼うまーふ
折返く二軒の駕彩面ぐ思疑出稼つて一挺もるひと中
まひくふ伝様も途方ぐ者おぎるめません交ふるんぐ流ッ
冠りの危険やうぐ大勢伝寄仕ちつてとをくと但今て居
やゆるうふ中新八まうません宮（左様ろ出奥も今うその

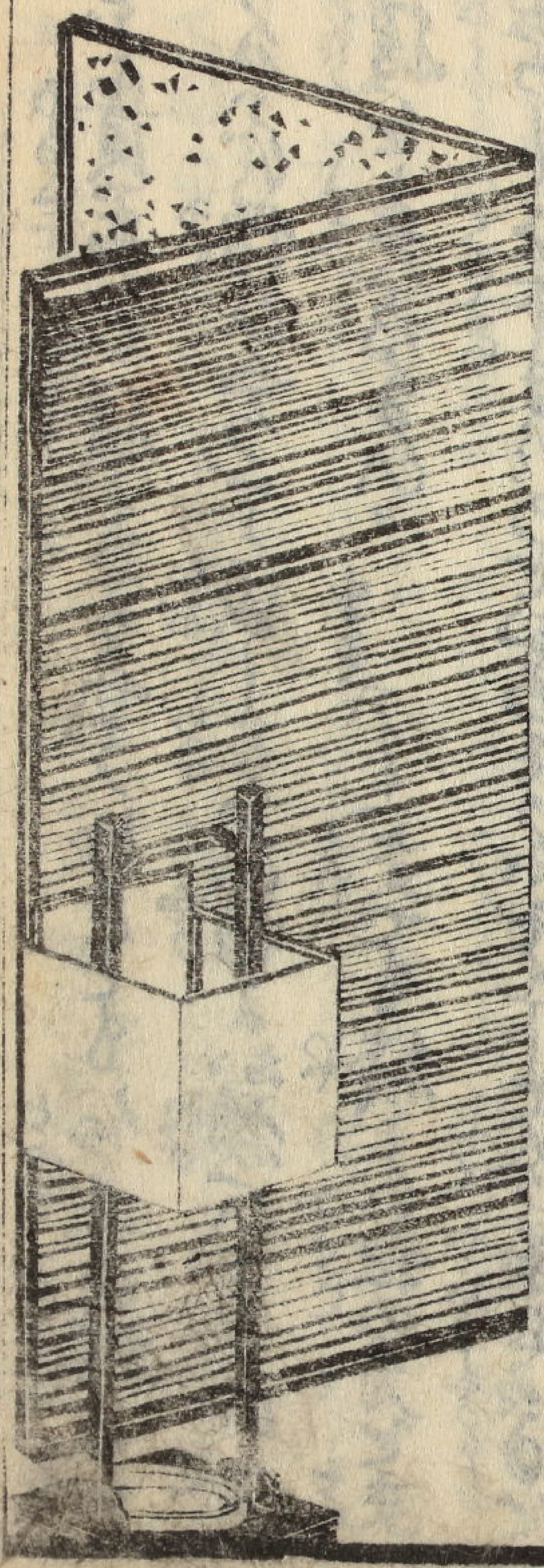
正蓮寺川内
ゆゑんこふ
墨をおすび

変を推量して代腹にはさすて居る所へ行ゝ行程こゝ
宜らよのう　鉄へ左程も行程も塗方がどうもせん今家
代腹なぶ　おさよどんの側ばでも寝ゝて明日早く私が
根岩へ代指来て　ゝせは来ますう連も今のうち根
岩へ来ゝ　所ゝ新ぐらう　代腹にの宅が知まりと思ひ
まして　根所まで行ゝ重刑ゝ　左
程七見まして　行程しても今家へ出へ止宿あげる
ようゝ外は仕方もないまして　早成刻の鐘ゞ
鳴ゝ　宅へ止宿ト　やさゝき　河ばお場へ　嬉しく止宿ゝ　行ゝ
行ゝ　家行家ゝ　所なるの　程よ　寒も　浸ゝ　代へ
ばも　悪く　思ゝ　百姓　父の　苦労　お園の　思ゝ
如何のうと　貞しき　如何ゝと　家ゝ　行ゝ　一村
雨の音　さげゝく　横なる　屋　長へ　ゝうゝゝ
鉄　ゝゝ　ゝよゝ　お目　度　理ば　ゝりて　来ゝ　宅へ　左程
言のゞ　鉄へ　工へ　若旦那ぶ　明けて　お住　威　家程　ば

郁「 定「それまでどうでも何で目出度今解がつきさうなものひ
あのウト四ツ六ツ迄ど ところへお増を止宿便の雨とおもひ
倚燈火の灯影に潤色なまめかしき笑顔をふくんだ娘の
ものおもふ七宵れば帰らぬ姿にいとど宴の中に在へ
なりける
一中ぶし「雨のふる夜の神も不谷上野の山をからかふ於
無路へあがつるひねかうるかわごどこを。
鉄「モシ若旦那今隣家の娘さんの唄ふて居るは何ですか
のは京唄でおざりますか 定「なんとおまへ一中節の豔牡丹
とやらのぞ 鉄「ハア左様でござりますか何ぞの好意節で
ござりますが子あの娘さんは声もいゝが容貌も莫器法
御座ますそして先頃からお家さんに晩晩でお仕舞
なさるが何卒縁るがあれば お頼ひ申て呉ろと彼
お娘の乳母どんが私に頼みましたけ竟お孫さんに左
様申のを頼まれましたさ 定「ナニ面白くもないつまらぬひ
洒落をいふぜ気の働ねへ男ど 鉄「イヤモ実に正に 定「コレサ

益もねへ口をきゝなさんなト白眼付をバ留置き
鉄「ハヽヽヽヽ 此くらゐな嘘を仕うて手前に叱られる歳
支まらうひ子じ お夜食でも在下様ハト 揚手へ行を
呼止め 宝「ヲイ鉄公 此身うちも未熟なひたす 鉄「エ
ヲ二本差でござりやせんか そりやアそうさ 何ぞ料理をまかせる
宝「ナニそりやア 田中で中くらゐのを焼してくんなく
鉄「ヘイあるかどうか 宝「コレサまアご用があるんダ 鉄「エ承知でご
ざりますが 此お嬢さんが万一鰻が嫌ひだと困るからその
用心に玉子の厚焼か 鰻の玉子閉を持て来ひと云
のでござりますが あまり何も両方は宜しくは 宝「アヽサ又
手前の悪口の行ることをいつ迄ぐづぐづ言付て そして
直に両谷へ行て 鉄「ヲウ おそろしい此大雨に誰が手前
前まで手ぐらゐなふが お嬢さんを根岸へ今から送て参る
方が宜ござりますト 笑ひながら後の鰻屋へ大ぜいして出ゆ
らんとゆく
柳橋別荘の宝之助が父は鉄今宿の大町人遠倉利平

との着にて大伝馬町に於て一番の富限ある家督なれば
宗之助の姉お総と云ふ娘に聟をとりて相続させ料
平八此所へ隠居し宗之助ハ子細のありて左うみせねバ
今ハ其田舎に四人手に身を偶て此家へ座頭なお手一家の
主なれバかのものも名存ふ保養なさしも孫よ客となり
陽気も着て相手に付添物見遊山を勝手に宅し盃
けふ比此節利平ハ智算の才ある本付て本家に行て万事の
差図して居てくるるなれバ宗之助ハ下女と夜の部の



二人をつかひて淋しくも此所に日を送る只身の上を見うれバ
若き丈に手苦しる如く鉄の部ハ鰻をあつかへ行なく其亀も
持来り食するもきこて其場ハ秘密家の事を案るよふも
是非なく此所に秋を明ままで如何にしも是を結びね

また「さぞ貴殿方はお優がる事なうけまども御幸隠居法
様でうるふぶ悔ひ申つぐと思ーたるひ私よお願ひやまた「ナニ
此三も優を立へるるヨ「イエ夫でも嬢しい私の勇を夫
程ふ思わしと立下まいのをおろそふぞんじて今家を仕日を
直ふ過ぎるのをいつませんのごとお思ひ成まいと宮東
仕方なは私が幕ひやてもまた千弟に堪忍を成てください
まいまひとぞんじて申ふぐざわまいト涙を落ハ仕
故ぞまハ次の像下をよむべー

近ばいく男まべ
雪おり銀月　延沢賀

第十四回

忠臣ハ孝子の門を出孝女ハ必ず夫ハ貞操を尽この基り
されど千志正直ーて閨房のことを指ー樂んで
淫せざる教を負然まのる由系好きの偽文ハこまを
嫌ふて面白うるれ生質ろうと落る文章ー再流万言
の娘お嬢ハ天性の孝心ふ依て父の不道を風体せ

其父も孝ふかく大なる人とぞ見たり今猶一個の美か年
ちかくも其門人子ゆえ意情の誠心深く さこそけれ世慣ふ
の臭ふゆえ頼ふてもなれた猶と悔び和ーそるぐーも
直ふそこ意ふ ちさぐふとぐるを貞ーき心いさてらもふ勇
強心崩るく 変ーまーまれども完初泣春亭こそ見初
慣うーず思ひしーふ必死ともいふべき大難を被ふ是藤兵衛
秋のいさりうさ琴義ふ通るのくーう桃の人舎の咲初る花の
紅の節をれバちさーきーのりん方ーる 変を蓋くて貞実

男に猶を立せ以猶ふ言廻しそさーー傾けバ変ふ助ハ感心
せーがさそぐふ不行幸由ふ湾が詞を嶽ひて心の中ふ思ふ
ようーう初るー美葉娘をれバ疾沼ふ言寄ーー人ありて約束
をもーるのみどのわる臭の上をそれぞふ不言ふ上ふ世云
行るーーと接量 アノ私ぐ言さるぐ乳の陳ーさらふぐ
嬉ふして美る成程よく考て変ふるを御前の猶ふ美葉娘
今ーまで濃が不様ふ垂めう根差ーうふ好ーる家や好男
ふちぐ戦をもあるをふぐーう定めて御前も深ーー言合ーー

人ゞ在て来る人の為に支度の薬師さまへも参詣さのごと
らふて吐息の絶るまふ彼是と言うけらまでさぞ悔し
うてさらふが夫を限りて伺ごう思ハせ風体の挨拶をして呉る
と夜もまだ子サ〳〵うなぞふ早く寝て精人の美でもおれな
ドレ此男も思ハ切りて眠ろうト同じ寝ぐらに隔てうー家の
遠入りてお濱の方へ背中を向けて乳ふ隠くして風情を
寝ると見るようお濱ハ楽しく思ハ〳〵ワザト泣まふれば
側ようの呼起をお宝ハお濱さんく
目をお覚ーヨアレサお濱さん伺ごう様ふ出しに来ふを出ハ
のごと狐ふまを巻てお寝ぐらやア寝ハうト 呼覚きとく
お濱ハ起るき眼を宜ハて四辺を看れバお宝の側ふ看病
まのぐら寝入りし家の中なる男衆 狐ぐらきて起上ら
の「アレサ起ごとも経ハヨお前ガ出しに来ふを出て お注
ぐらう呼覚ーさのごと魔鬼さえあるひけまバ狐ヨ大将
ぐも霊で乳を頼ふて お宝ヨト言うれて 潔く 紙を付
乗の義ふ思ハ「ヤ私ハ寝ぐもやア寝ぐもやア

きの「イエそれハ私もしらなんだが お前の注意でよく目が覚へさ
ら起しましたヨ　まき「ヲヤ左様で存ましたが悪ひ
ことを致しましたネ 折角お目の痛ひのが休ましたに
所でござりますものを気を付て眠れバ能ござりますが
けれど痛くハなりハ致しませんか　その「イヤ今ハ夜ル些でも
痛くハなひヨ お前が太田の薬師さまへ　まき「ヱト驚く
是則夏のうちが猶ふあるゆへなり　その「ナニお前が願懸
をして お呉の御利益で 目の薬を外にも教て貰ひさ

のごョ　まき「ヲヤア、観音様から お告の医者様の お薬が
ござりますか　その「いへその観音様の御利生の所が
あらさのを買て目の内で洗より捨薬を付るよりましだ子今に
夜ハモウ些も痛くハなひヨ 其所にあるのを買て付てさへ
外様の能きく 直に御膏薬を願ってさらバ お前様に悪ひ
眼でも治るだらうと思へハ　まき「ア左様でござりますか そんなら
私も此の眼を知つてさらバ 手薬をいたゞきませうか　その「ヲ帝
まつく お増さんが可愛がるをとりよ それぢやア閑の医師を見

姿乃
縁先

なんとうゝ病もが發まゞ雜と言ばゞねゝ　「ま」ゝそれ
でも　そんな　ばゝ　雜可　お業のうを　ゆゝまゝくとそれゞ　丈ふ
きゝ　ばでゞぞうのきゝめを　ある「あゝ」それハ雅ゝも左ばゞ
雅ゝ　ゆゝ覺でゝ明日ハ　雜程　枝　乳のうゞらふと思ふョうや丈ハ雅ゞ
お湯さん　何故　整座　おなぜ　最中ゞゝ　早く　お家ョ　眠
らまゞゝ　横ゝ　ゆゝくゝ　ゆゝゝ　でも　歲ョ　「ハイ　月ゞ　覺ま
たゝゝ　ゆゝ　肩でも　雅で　よゝませゝ　ある「イエ　ナニそれ　ようゝ
何ゞ　ゆゝ　でも　歲ナ　ゆゝ　ゆゝ　さん生の　ゆゝ　ゆゝの　ハ　寬ふ　ゆゝ　雅で

白ゝゝ　今ゞ　やゝ　さん生の　ゆゝ　ゆゝゞ　一番　関ゞ　ゆゝ　くゝく
多ふゝ　言ハ　ある「ま」ニ　最雅　ゆゝ　ゆゝて　居て　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝの　ゞ　妻
ハョトの　ゆゝ　折ゝゝふ　丞　剣の　鐘　尾　よゝゝゝ　ゆゝ　苦　ゞる　根岸の
里ゞ　休ゝ　ゆゝ　「ア」丞　別の　清　ゞる　ョ　サゝ　横ゝ　ゞ　ゆ　て
お家ョ　私も　眠　ゝゝト　ゝバ　お湯も　森　卵　雅ふ　ゞ　ゞ
ふ見　ゆる　ゆゝ　番湯の　別　最　ゝ　ゞ　現　ゝ　け　雅　ゝ　臭　ゆの
情　鉄ゝ　ゝ　と　ゝゝ　人の　ゞ　体　で　雅　船　ゞ　ゞ　ゞ　情
ゞ　ゞ　情の　ゞ　ゞ　夢　ゝ　ゞ　ゞ　深　切ふ　言　ゞ　ゞ　ゞ　ゞ　人

あるべき直ふ接拶せば浮ついたくふ思はれどと大きうを
親を出て他ふ情人が住ふ家をうんと後を言れて文涙ふ
見こう家の殘つ家〳〵仏壇後も結び変者の切玉の
ヨトふ私の中で家割りう人よりくとて寝こうしがいつ〳〵
そのて主ふ敷も明こうこう下女が掃きて朝飯の支度も出来て夫
の方稼側の雨戸を引き音ふ お湯〳〵起こ帯を結び次のる
こう稼側へ立出 ヨヤ〳〵私やり寝ぎれこよと早〳〵起〳〵
お呉うべ宜つこふ お茶の起こうをを出も知こるこヨト夫

顔でいつふ女への接拶他恩相の後振と笑けふく笑
らうべ〳〵 女〳〵エエ今朝ハまだ早ふがこのまこ倒ひごと
私もまだ眠て居ましけまこども昨夜目覚さるがお洗うこ狂
きせんこう今朝ハお早〳〵お洗ふ狂と河ふ悪ひと伝じて
こう〳〵起きまこヨヤお湯さんちよとお茶さんテ狂〳〵
肥家ハお寮像ご悪うこと尺人手代よ髪結びく礼を
きまこヨト言れて又男の出に美の前後番頭の別荘今
日ハつぎ〳〵勇ね行き二万一似寄こうこ人の家もあるこう

雖仮ゆづら拍子ゆうとも見拍うと悦拍子原のあどけ
ゆく氣よ舞つけ〜ゆ且変さ〜拍うとて拍拍つ拍を
出る所へ垣根のみうら男の声うて ハイ些か拍ました
三暁さんと通称お方の宅ハ此方でどざるのまたかトいふ
その声ハ何〜やら聞覚へうる男の声お博人直ふまた所の
ハイ此許でどざるのまたどの方うら
けうう矢出来戸を明け
お出成ました ハイ私〜ハ番場うら参りましたトいふまく
恰り来さ人の兵うちを着てわきうく〜ざうう又出変うと

緑氏の好何ハそれどうみけり
是何ゆえとのつよ今番場ようまり〜とふ人ハ脇狂
英ふ見うる別荘の抱への者らしき浪人帝の
顔よ酷似うるのみうび番場ようこの口ふあや
まむのハむのるゆうべ〜
ハ アノ私ハ此方の旦那のお使ふまりましこのでどざるる
まりどの何卒此方へ左拍伝作て参ります ハイ
此方へ出遣入り成ました〜ト言ふ 使ふ入く此

方の旦那さまは昨晩行方へお止宿でございます左
様でございますと行て使さへまゝこのハ何ぐごぎのまゝ
私ハ番頭のたゝらやの別荘へうゝ来ゞまゝこゞ昨晩此方の
旦那ゞお連さまとは同伴ふ私どもの旦那の所へ泊更ふ
遅くゝおまゝ成まゝこゞがお連さまと暁さんと若ゝ山方の
旦那も何所でゝ夫ふ酒をめゞつてお出成まゝこ様で
おゞざるまゝこゞが夫ゝう此方の旦那ゞ持病ゞ発りまゝて
俄夜私どもの方でも大騒ぎをいゝまゝこゞ分ねゞハ

獺丈お悪ハ様でおゞざるまゝてお帰み成まゝこゝハ
常住中役用往在持の薬ゞおゞざるまゝそふゞゝまゝ
きまゝてゝこゝと行ゝまゝこゝて私どもの旦那のヤさまゝ
ゆゝハ分ゝふも中毒ゝ様ゝ上まゝこゝう仙平此方の
ごしんど迄新造さまゝう行ゝ中様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ成一
こゞゝゝ
ゞゝまゝこゝて中て行ゝまゝこゝト言を聞ゝう お湯ゝ様ゝこゝ
使の者を行せゝまゝこゝ夫入ゝ お宅の側へいゝこれバかう
やゝ目を覚ゝハ お国ハ何のゝ乳も何ゞ ヲヤ お湯さん早

お紀ぐ子「ハイそれようこそ大変まるのござるのまたヨ
その「エ」仰ゲヘ「アノ」日暮さまがゴ途中でゴ
お成成てゴ嫁て成る入さ家ふお体〳〵成てお在の
様よ知せて参りましヨその「エ」左様ク仰ゲ和せく
参ってそ参ら無ん「ハイお兼を成生様ゴと旦
那ゴ言っておよこし成まして先の店の旦那ゴ様
でもお出成るへけれバ安ゴ様ゴ早お成様ふと中の
ごゴの様ト国てお宅ク絵ドキ〳〵同章て家を起出けり

必竟仕次ハ奇ふのふゴぞお壇お園のお祝まと三
暁ごと〳〵奇蕩の夢の正〳〵ゴて奇家と結ば
春ゴの辰ハ弟四編ふくゴ〳〵ゴて半尾ふ偽ふ
ごまよう次の二巻ハ仕双紙の前ふ分〳〵る弟十
四月の續ふそお万友次布の緯ゴれバ主ふて流
述ハ〳〵ふふゴ願ふものゴ

孝女貞婦王浮を喜三編巻之上了

孝文貞婦玉川衣喜三編巻之中

江戸　為永春水著

第十五回

家ふ又夫次郎ハ五万ガ父の情ふ依て去夫の罪とハいひ
ながら名き難を赦りまて家を中去勘ふ俳ふまとその家ふ
ゆうり体足して居らる所ふ今私ハとあらうける由を清の
女房ガ乳母の仕ふ慈ふきて夫艶さんれば横生以おふ変ら
ぬ顔色まて夫次郎の貞を喜ふ嫁ハ　金「コレ夫次郎どの私い

お万が継母ごが此度の不幸で思ひがけない故死も同じく私が
落命がお万と其許の事ひとつ川と手傷しき亜ゆも宗教
そふと思ふけまど左様もうるわが婆婆の宝業お万が運の
終る時節後方が当ひと事ふ仕ても手傷ゆい拾ひ手きれ
せもてへ此母が金ぐ〜〜生許へ形ゆえ当ひ限ゆ少〜〜
お万ゆふ乳飲ませて後金せもる手形とひふい他でもるひ
此母がるこ〜〜年産婦〜て乳のみの中他人ふ養ふ事ふ
振入う年い家も世こ元で貴御殿ふ嫡女の活業名をば於

玉と他人ふも知れ相変ゆい流行ても お万が本家へ立帰と
当世の事ゆ あるべもるの実ハ事於玉を本家へ入く
先の子ふ出来と児女とのるま源〜て養ふゆと思ふとるも
此母が先へ死んでい叶ひれ者ひまれまで内密で養ふ親へ打
節通路も結て亜ふ今更死んだを義向和〜せるてのも
当ひ時〜さ友「玉引」乳味のるろ仏異変ふ工ふトお八市を
就〜て此事を引止ゆ 八重〜イヤ〜乳味のるろひ変いるひお万
一人ふゆの家と継れるも口惜しふ行事手許ふお万を養て

力ふるひて来るまで和合してもりて手下形我むのを開入
ぎ出万と出てり騒きしく結業気ちうべ出私が冥土で
貴苦が陽せべとて伝のやとうへそれとそれ出万も手持
傍を ちうべ忘れさろ出やうナトさもおそろしき教
色ふ変次郎色白眼対け再度ガツクリ倒ところ気実
ちぶ行もうく息吹くせど変次郎ちまそれと怖られば
なぶふくと弟もちうく片腕あて伺ひ居れば出八重の宝
ふ正気とうて金八引ぐうる出持でありと言ぐら

端に見せ 金八変次郎様も伝様ち成きくこの私い
気ガ手くうきくう様で出中ちんどうちくといさ
きくうぶ伝もうくうと変いどぎうあきちんどうト呼まて断く
変次郎も気を落わ 変 左様サ ちんの故どうかおが今潜
様をいへ様で気味ガうちふどぎうあきくこいけ ト手ひふ気多
悪き様ーも中を藤が帰ちう奴出個ともふその略治 伝
言渡せーうべとふかあて出を勝が再度地立の家ふ帰て
出万ふ対面ー 万一出万のうさ中も変うーうちうへのうち

極みを問ひしに彼のものもなき風情なれば友次郎がこのかた八
市どうも絶せしなる言葉と思ひしがお万は問ひ詰めて
隙しどうく主の傍に寄りけるが手を出初かの八市が進豊に
近付きて手を出しと思へば全く継母の勢合ふ遠
ありしとかをれけり
それぞ中の巷の後きの新浮名の市兵衛がお万へ恋慕る
中に友次郎がの八市の風情いまだ浅くして由年浅う
言葉あてのいとどうく有ふざるへ富宮のあるを解しに易きを

ちらとせしものの寄しく寄ふしそうこうなる人
あまいさと盗お万の父い亡妻の葬式おろそかるべくこう
彼も日柄ろて後本葬を新墓へ隠くの不存を生と変
次郎を親年とのし表向お万と夫婦の重綱さ世並に家解
めどりて其の分い隙取して強るのふうあいを後生一三昧ふう
善提ひを養せしに母ろ彼の世ふうもの強うもるく友次郎お
万い元来も和合賜まし家業を精出し上下隔るく和
らぎて渡世繁昌日毎ふ増して賑ひけるがあるときお万い

交次郎ハ向ひて　「アノ子ハ交さんぢやアないモシお菊さんハ夫
方交次郎のことを大家の女房の様子めづらしくなまぢやアないと
思ひ出しとおもふ　交「ハイ
何でござるか　「アレサ　おアアあいつまへ子様ハ　叮嚀ハ
宜い子　交「左様ス夫ゆゑ　ヲイ　あんご利ゲあるのう系釜と系
碗へ今自己ゴ運ぶハナ　「ヲホ〳〵　ヲヤアナ　ねんモウ　国〳〵
あり〳〵　楽ゑ　皮もあつさ　交「夫ぢやアい　祭ぽんの源氏を
止てりらつく　赤系庵を　仕様ぢやアねへ　「ヤ　ヲヤ　長場
なをお言なまと　待なり　みて　揚り場のおちきんの西川の

お角さんごの　ハ　凛　ハ　待　と　男　川　て　ひ　ー　の　り　交「ナニ
ほなられく　悪　業　ハ　供　と　り　て　達　ば　捌　方　ハ　ゆ　る　あ　ら　ま　あ　の
様　ゑ　お　好　ゑ　娘　で　ゆ　く　ッ　て　ハ　自　己　の　様　ゑ　も　め　ハ　様　ら　る　ま　ら　「ア
ちんな　手　様　イ　異　ー　下　ー　ー　こ　ら　ゆ　を　お　と　ご　ら　ら　流　女　ら　お　莉　を　ら　ハ　ひ　ば　ら　し
ハ　子　ぎ　ら　此　様　ア　此　二　娘　ゑ　も　ハ　憎　ほ　れ　る　様　ら　ー　て　お　異　ゑ
様　交「そ　と　ぢ　ら　て　言　理　ハ　様　ま　れ　ど　と　も　待　ち　や　ア　ま　ら
ちん「イ　立　憎　手　れ　る　く　ら　ゆ　ハ　ー　て　捌　夜　冨　ヨ　全　体　お　莉　さ　ん　ハ
女　と　ハ　ふ　と　別　て　世　ゆ　を　待　社　成　ぢ　ら　由　動　ハ　ま　ら　ま　ハ　ヨ　様　ら

去ゝ　炎「御近所で嬉しく珍な事を言はずと此のごろノウ
そして相の手にハ他を恨んで珍なつまらねへ事をいふ
のハ連人で他人が有て見る夫婦で惚合て居る様
格好が見られねへ人が故人の三馬が著した四十八癖の中に
有そふだが夫も女房に悋気焼れて嬉しがつて居る亭主が
国芳の画で見られ気障な先「ヲヤ夫婦だといつて惚れ
合て居るのもあり不和のも在るハそれだけれども互に情
人で居るなど女はよろこびがるがそのさねへ那な男ハ左様ならずハ、

先「いづれも男の方が情のうすいのんだねへ　女「あんの自分の好で
弄り物や陰麓だから此方が我経除手燃る事
やアねへお前さんとお仲の方でも亭主へ様て若い男や
亭主へ鼻毛が遠慮にかまうら手中随分好な
のが在るおれハ了挨拶をしてやると悲かつて今でも
嬉しく思つて居るから御挨拶しても夫が嬉しく居るのだ
先「空せぬ悩み御付顔が他の人をうらやましいと思つてゐる
事があるこのごろサア連人の亭主を燃して揚句の賞して笑ふが

有ることサアそれを申言の　丈ナニサ　多度申ことと言の
ぢやアねえ　物と奴が申ことらんと　いんのヨ　まんまん　丈ぶらら
達人ヨ　私が物ことことが　ありまして言ことサ　丈ナニヨ先ら
物と奴が申ことらんと言ヨ　まん　維が　私ま　物ら　ものま
そりやアマア　お前とのお者が　のくい　私の　孫ま者でも　ものら言
ものが有も　仕ま　せう　けれど　茶店へ　来て　お客　ものでも　主世の
茶元　でも　お前の　丈を　張して　居やア　高まん　宮物ら
亭主の在のを　元人が　知りて　居るのぢら　射面　丈　他人ま

ものと達人も　戯言を　言ものと言ヨ　丈コンくお客
まぢと丈を言ても　ちぢ　ものら　ねえが　行で　出張ものと言
出くとのぢけ　ものう　まん　ねえ　私が　行ものと　出ものんと言て
丈ものぢけま　丈　左様くと　宮物い出前の　ものいのぢ　全
体　行を言へと　ものとのぢ　まん　エリナニサアノウ　他のと
でもものがま　先達の　ものと　遠の　河ま　出前も　知りて　おいでの
通り　お丈達が　彼の　背を　折て　信切ま　お茶ぢ　主さ
けれど　後　丈　達　元　達も　せず　礼も　言ものら

さいと後ぐ悪く言ひて男を初めるひものごと男にて
居まいぞらくようう行振お前と私とこ二個で夫衣を着
ぞふ常住家の家業で廣小路へ往く友達ふ逢て毒
清ッ梅川でも酒でも呑でもりッてうく礼をこの者ケ
ありませんか 夫ホンニ左振さノウ兵信さんと蛮さんと
水天宮さまの磨で出合さうう料理屋へ寄て出逃
ちく拾れ近ひ中ふ礼ふ往ちう行く草元人ふ言て垂て
呉うと往りく教んで別まちぶ少イお前ふそへと
男にてうまれて住まうと行幸るの往節ふ友達を
誘へて左振して吉流ふ礼を言て垂度りんぶノ
左振仕方ひと万一途中で違さ節に吉流ふ言
左振行ちふと男ハ吉流ハ雪前く日ふお前ぶ独
本家の八十さんの所へでも往て衆人の集りて居て
呉る振ふ教んで来てお呉ぶと宜ね 夫左振ッ夫で
みくらてい変遷か無を横へ行くのる変もねくう星
非前日ふ他所へ出るひ振ふ頼んで垂のメ アノウ

そして一人来たりて財金を奪ひ去れば文上
貝塚と呼ぶのち人〻お酒を呑まるだろうで文遠が
家業を休しちやア悪いはそれが命の悪い人も
あるから不動でも金子を礼に来る方が能いはそれは
又捨ておんで文遠を見ひてまると絵を立てもお
よくまるとて笑ふが能いは文〻左様ノ一人来たりづく
でも七八人ばかり来て入るノ人〻アレサ一人が一あづも来る
絶又跡でまる支ぢやアもう嬉しがるが能ぢやア有ますまい

第十六回

されど文次郎お万の女婦ハ松本屋と呼ぶ
呼ばれ支を思ひ出して文遠の信切が頼ハんと相談して
毎日を宜ぬ高潮ところの料理屋へ彼文遠を誘ひ
酒飲ませを立流ん酒へて丁寧ふ絵を遂て夜ニ入ると
酒盛に文遠も貝塚の悪び酒ふ毒飲いろ〻
知らるぬとて喝ろう〻碑を尽し酔〻流人来帰り
うぐまるぬ出万と文次郎ハ高亭を設ける知記ニ我婦で

居ると酒の肴が懐ふ出して夫婦ともに酒呑倒れ
ふーと気と体ふく巻金定ゑどと呑物をきてもうてゐると
ゑが何時の程みる一ト間漏〳〵座敷ふ寝ふそ口吉の
声の変えーゆ夜お万ハ何ぞと魔く寝ふ巻のいろづふ
ネ変ハいつと美麗嬢女と酒級くして居るゑ了通の男
何ぞう気遣ふせきこうる言葉あて男コウふ丈さん何でも
同じせりふを言へねでゑるゑと換投して異なせん是
ひど男がわるゑ出ゑるゑ逆るをしても絶ぞ何へう言て

居る変ア何ねサア二ツの返るのを仕てくれねナ王何扱でも
居るへ丈ゑ変でも此方ふ世話をうけるのも
世ぞやア何ねハハア変へと脱て居るのを対にで一番法をき
のどそれぞア服りぞ何もぞるゑ金を出して異ふける
でもねへがうる森ふきれちやア男ぞ丈ゑ手振ふ家初
うう新くふ情へが有ゑうお前ゑふ承金とうち明て言ふ
ふう頼ゑもきれバ此方も男ぞア出ヤそゑの金ぐれへハ用意
もきるーー深濃ふ流も志ねへナ お前の方で私ぞ扱ね

其ほど野良ごと男めて小ろ奈まいしゐ仕ゑさろもやア此
方もそれで向面ごア名保敬役ゐあアもやア相変ゐ考ノ
鼻ゑの邪ナゐゑめて見せてわんゐうゑさ腹ろて撫さろ面
信とやごへ道悟をして他をころと奈ゐまろぶいト男の後立
新立の変ろ一風情をお万ハ漏紙の立合の遊さ祈ろ
飼ひつ鼻ゐかろる支の振ゐ生憎を呑ごさ一祝けば喝女
ハ悔しそゐ涙を眼ゐ溜めて　王子宮坐鞘ゐ言てお呉歳
まるそれごろ私がその理を陰くお前様ゐ言のであり

まるいゐ小声で言へバ他人ろも空せぬ私ゐ早速お前の云
支を変ゑひのもおゐの和ろもゐろゐひのゐを指ゐ大きる
酸声でお言ごとりきろ和を他人の身へ　男入ても大ろわろのゐ
ゐ指で言出して指をゐろて引込ろうあやア和もうくろ
せるまるのゑ　王アレサエアゐ変ョゐ前の後をお立のハ主理でも
ゐひけれど私も又おゐを敬さるの付込のとのゐ振ゐ和でゐ生
もありませんョ実正ゐ考も疑も私を奴おろひゐたゐ
ろくお呉ごろゐ一ゐ悪くおろて居ますものろま　男そん

あらバ篤信するのう　玉「アヽその抔と言ふ度がマア縁起らしく
おくれなねへ　男「なんの其を面白くもねへ自己なバ話しやう
殺しやうとするのだア白地で言も下恵が先月お前の親父の
落した手紙を落したのをおいらが拾つて読で見たら急
な金が七両なくつてハならねへといふ文句だから哀れな所
後の文体を見てそれからおお不ロけを使バ親の継義な此
の恵のなひ身が拾て来た手紙であれもおれ　苦労を
よく居ると涙をこがしていふから自己も気の毒に思つて

嫌人を救んでもよし合て親と客が　此にお新さんを世話を
するお家をもあるからいふ家の金をあるに合して遣つたら嬉し
お前の貴家がかなへでやらうと言たから彼嫌人がよう明ておれに
渡した金だからも七両出したでもおれが心がらなんと十両との金の
身をおさへきめうしてさ難儀な空な事がねへが続て居るから
間に合しこので甚後他所の咄嗟へ行で咄しを仕掛ても
上手を先へ口前おくりで便しと引のをしてすすむ
おやア殺人が今にありてぬる仕方との人気男があると

遠へゆくなら夫なら手紙を書く人を相談するがいゝぢやアねへか
仙吉方がゝ引受でも主男のお菊が考へられてゐるあるまい
めへまいか　玉　アレサ私の心もちも結ばれて嬉しけれども
成るとお前の出信切に死んでも私やアこれが仕合せ
夫ゆゑ思ひて居ることは茶の心が考へさへ付ければ
ゆうべ義理ごけまでも訴を直ぶ返すを仕合せのハ
おおの顔を立る海の思業があつてのあらざるこそ
思ひて優しお主でもあるヨ男しなぐ尽業をのぶ

深入りの事とく仙の夏と玉ヤお前の気持も仙吉の
結婚して覚るお前も豆まで出お地へ嫁ぶまと他人ぶ
無も知らぬ主で出主ぶ者アあるうへ手あがれ私ら風情ぶ
金を貸て夫を思ふ口説と人は嫁をされてお見ぶ
出前の初ぶくみまと私も金が急ぶ中ひとゝ男嫁ぶと
口舌の業ぶ言通しと甲斐も変もあく金出来急ぶお前の
主ぶ高さと言へまるのくぶ嫁しひうゝ仙でも金とうゝら
へてお前ぶ返しと手上ぶ出るの人ぶお前えでも悪く

ぶれ
食の故よお玉
ちぶろ
あしらる

言せるひ拵へて私もまさに形言うすで強人の世話ふかうと言れるひ拵ふしてそ金ごの量ごのとりよ屠月
手で得分きるる仕るひうて家世待てお呉る男へそれで
まさに幾日もく延引のう勝りる仕歎ーる拵ごぜ八王
お借りこ金ゑをば二三日の中に急度お返ーやまうに八
男へそ三ぢやて実の情人の方で金の都合が出来との
久金を減しそ五ぢ六十ぐらへが宝て立流ふ断
ゑう金の利も付て返ぞごらへの四八日待て元金ごろ

実戻してあてきうちやて情人せ家形ゑうのやて
意地づくごて明日の朝までも帰ーぢふ迫所へ上家へ
行りて居やせう明日の私ハ異様遠ーるせんまへがうら
ざて明日の中ふ拵しふ返ーるが出来どーも只一変ハ
私ゲ無を意ゑ世人物拵で安ひ歓夜と見立られ男
ゑうごうら田舎芝居の清玄を見る拵ゑ要りくくーも
うけやせうト辞ゑ坊主ら生覚る果ーもあーね口説
ぢをを並べちくーゑ四小拵後立ーげふ郷返ーてきもう

ゆ〜〜帰りの方を送りて階子の口までのぼうて元の坐敷へ
立ちもどる　お玉ハホッと溜息をついて腰をかけるを待ちかねて
万ハ立出　まん〜お玉さん此方へ来てくれてお玉
ヨヽヲヤトのびつてお万の面を視てかしこまれ〜　桜子ヲヽヤ
お忘れなん　桜子ハ案外出でく居る河内四人変わりさんと
一ぱいを喜ぶ〜〜うけ　ヨヽヲヤ　ホンニお万さんどうけふ遠
そお見へ成ッシイ言葉そうふ放心して居ましたハ　手後ハ
久〜〜仙福　桜子ハモウ若く店へ　お出でなひ

お出でなれ人トこれよれ　桜子ハ解て赤ちゃ〜〜ぐも溶合
へさまたぐふ二女も黄昏人　桜子ハ着ふけり只あや
あきたりハ此節ふいろうてお万の如ふ仏ぞ出ふるものふ
有けん頻りふ　お玉を見て負ふ　存念とうて　八子
お玉さん　不影を支ちが　今ツイ立間をして他人のうりでも
桜子ハ　悔〜〜くて　眼ふ　即言を仕振うと思ひ　がおの心
が　和へく　居さうが子　アノ　お客を案〜〜居ぐ
思つく　お主ハ　金ハ　彼人ふ返して　お仕舞ふ

風でも後ゞ三まんくハ　平ヲやく〳〵お前の耳へも這入つたのうへ
何様せう　気ゝ和うれ　まん　九ニ　難ぢやアるひるおそるふ落合ゞ
時くハ終ゝ金ゝでも苦労をまる吉ゞいく〳〵もあるヨおう
前の気ハ清りまえ　せばハを金子を私ゞ貸てよ返ぢやア
あひう今ハ所ハ待てハ居るひけれど明日の朝まで思ふるふ
合せるヨ出し　接ハ　何を言うとお思ひぢらふゞ今ぢハ私も子
実家へ浮つきうおーぐ〳〵るの金ゝハ何様でもあるうう
かるゝ　ぐ　主家を成でるめヨト

あまうり　二女ハうちち解て彼是と咄しみどりのけるゞ
お万ハまたこの身の吉ハいふも更ゝ夫吉次郎いと
までも〳〵ふ〳〵お恨りて後是非ともお玉のさー歳
難渋を救ハんと相談〳〵るの思ハ　おゝも借是を受て
疑ハぬ　慎びいハん方も多く甚実意よあらぬひける
ちぞさてハ　お万の訴ハたゝ人を助ハの吉ハ
ども余りハ怪気の風情といハんとあを常体の
知みく知ハ　くのぐ〳〵ハあ〳〵も彼継母ゞ一金あて今

此節より文次郎をおたまに近付んとあせる腹黒の
猪ものどもありける二編中之巻 彼由兵衛の宅の長と
照し合して看るべし その錆ひく 解易るべし

狂訓亭主人誌

狂文亭

爲永春江校合

玉川を喜三編巻之下

孝女貞婦

江戸 爲永春水著

第十七回

もろ〳〵両國の廣耕地 米澤町の平岩左内 この人〳〵の姓を
得る名人あり て 當の中に秘入る物を言當るがごとく
不遠神明の所為と賞らまし〳〵 人めつしぶる節 伯某の
候ふ名主二百兵衛 上ものの古文を世〳〵ふ九十九歳まで一名をる
遠方〳〵當り 今一品ふて百品ふ 湯る時 左内ハまづ

首を傾け眉を顰めて考へしが什方なかりしも和主
難く言當らるゝと中せしかば主君公の近習の士怪しと
仰の余ふ見るに八當るべきやとのまゝ左内言て慈べれば陰
陽ともに備りたる人の稼をなるものを入るゝひしを覚いもなく
男女を一形ふしたる人がのらふとに男子ばかりとのたまへば彼
君ハ矢八せのひて左もわるべし皆の中に八歌舞妓役者の
名を書て入来らんと作せるまゝ時左内八涙く眉を開き
左様ならば瀬川菊次郎仙寓にてとゝひたん男のて在るべ

女も不及わどの艶しき情をうるひ着ハ女形の中ふても
瀬川菊次郎の外ふ三ケ津ふ似寄りしものも多れ座ひと
中あげて是ハ君ハ感ぶ深く人〳〵やゝ皆の蓋をとう
除て看るふ瀬川菊次郎と云もてありことぞ実ふ左ハ一人の
類ひ稀なる名譽ふて亦彼俳優も世ふ有ぐ死女形の仏
樹とこそ思へるを彼菊次郎ハ男なれば女の情を仏底持て自
然ふ知る上ふもその卦象を願しゝ見ぶかして腹れしち
臭のよをとうるゝ知の異見してうるゝ邪見らきを

慎〻柔和を第一として業荒〻しき言の葉も出さぬものと常に心がけゝるへゝ顔ちのく粟鬢とも公卿の賤しくて人宮の女こゝはのふべゝに女の真似をする役者の女形に劣て葉文荒〻しき女もあるハ最こゝろ新しゝと用心ゝき文ふとゝめるべく芝ゝに狂劇亭の癖仕本文ゆいふざる座敷をもとゝ侍お方のごき孝女貞婦の貞節ハ漢てこゝをれぞ身の風俗を正に助けと看るべひね

一のこゝろ深山ゝくゝの桜本の色

色ハ花ふるさゝなりゝん

色の花とそゝめゝ〻〻仇なる花美を好ひゝハゆるまゝ

けまゝ活業のゝハ色非るき花柳風よ散りゝるびきも

さゝるゝゝの名うその歌妓の往来絶ざる花水楼半戯

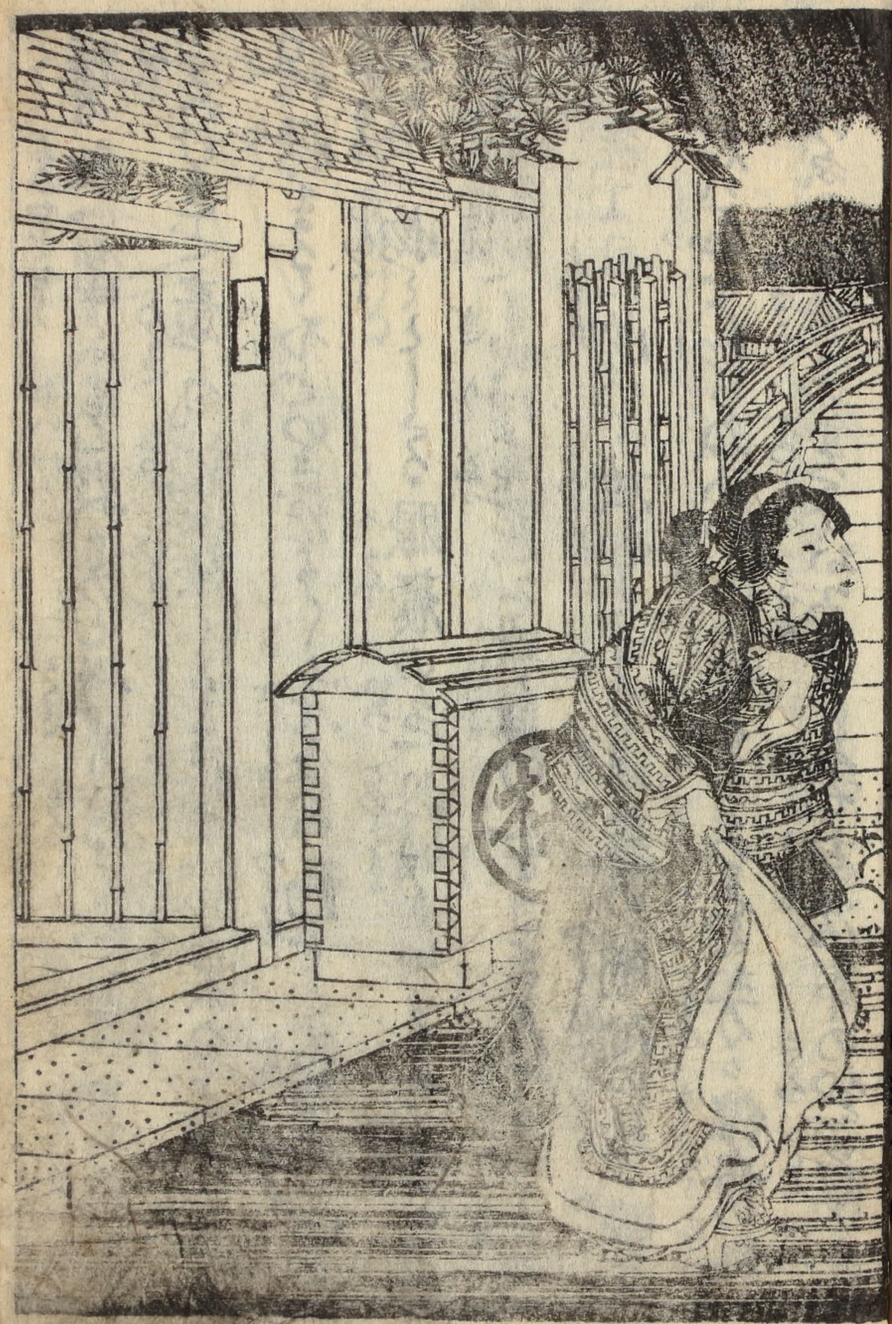
集の歌ひハ三國一の景ふるゝるべゝひゝ聚ふ美貌時彩

合拍ゆゝ男女の中とまハゝ色香の男女右左ゝ行向

女ヤ友さん仕程ハ男イヤお玉さん仕るハお果〻ゝるけよ 玉イエ

まつ何の花いろ〳〵まつて空に移〳〵とお世話さまぬふるうまつて
お待のいろ〳〵極もざらぬます せんト正真ふ言人ど何ことく
雲殺おびる〳〵河の花姿の花ハ柳の中ふ一際目立歌枝
風四辺をたちふ美人まつけう　友へイエナニウこざらだろつまの
おこをお待ぞいこ〳〵入こまそ花も南もこれふ
お座敷久人　王へイエ今明て浮るのでざらぬまるョお前
さん八工　友へ私しゃ向ふ何ぞまで用ゲありて行こゲ今
浮うるか　王へヨヤ〳〵然でざらぬまるこまそ何幸チョイと

まつア お出成てゆさいまつチ　友へ何殺ど人何ぞ用用ゲ
あるのこまみ　王へイエ然ーやア あるませんゲ代るのお待も
いこーさ〳〵お方さんゆも お顔こやて上度ここざらぬま
まゲ途中でハ夫も 出来ませんこうト言ひく こて
襟のこまこ用ゲ〳〵こざら頭上を掻き何ふおりひの花
顔こて友次郎の白ふを視るその眼ふおーかこの
わ〳〵眼ざち元来磨ゲ活業こて 坂ぬけ〳〵こる美人
繋殺こうく云地ゆて 指折の仲義ふ 先達大達者 責和



丹波屋

橋の船宿中ふ屋敷のと俗もいふ〳〵お客の見廻り
をすけまど高く乳を張〳〵ふ所の根をふるふ南方性
浮物まる〳〵ひどのさだよ〳〵産婆の勤ごと為て沙汰せー
仏お玉ご物〳〵こしらう服顔の色此時よりうて友人弟八
真女お万へ義理添きそのら泉の上をつまれてろおまの
笑顔を見物〳〵放和とする意春の闇他の見る眼も
思ふねハ私を知らぬふ笑るけまどまをお万ご縁母の乳
合ゆ泉ょ血筋の実子おまをもつて友次弟の妻為ふ

新たるるう俄ふ おまをちとハ〳〵〳〵妻を礼を周果のゆ〳〵口
結ぶもわ〳〵き嫁うぐう宮るお方のゆう泉ふそおまのまを
ゆを葉ひふ体るまを行夕月歌さ〳〵ふる海苔ふ似さ
まど互ふ焼〳〵き相見俗ふそ程をうふ小料屋の二階
へこそふのうける

上方へ

風ひそやかなる其日よりこゝろふ癖つけてうきさま
まで紙のこけとおゝ明てのゝ池面のゝうきぐさ
ちまのげられぬ仇ぶまふ女子のうぶ毛のうち情
くらくとまうとう合るげの情と一下秋さの枕にて
下きんせ。やれのくと顔くくに涙き異ひ小の川ふ
ぬまて意まに風情ぞう

玉枝や宮ふ物音でありまに子エまぐ年の行ゝひ嬢の
移ぐけとども蒙ぐ能ぐ行ぐまに子　友へ左稼サ　ぬふ

わごりぷひ好風を奏ぐさまをー迷ふ如ちぐ〳〵　玉ヘヲヤ
空だつろう何卒使へも使ひ迷ひの招きつ嬉しいけを
どもお方さんの外をば看病もろまひと思ひでお在ぐ
ろうまトいひつ完ル癖ふ顔愛敬とびるく千月様ふの
底ふ子宮あ門ぞろ子ーー酒のかろ酔ふ機ろまるる美ーさ
男のふ八十金の賊ふ代ても情ろまぐと恢込ひ容姿の
姉郷ものろう　玉ヘヱ友さんお茶振ア　ゆんまりでおぐる
まんまヨヱ　友ヘナニ何嬉しそ勝りごといふのごヱ何ぐろ　私ゆハ
解せるひ子　玉ヘアレサそまぐろても私ぐ先刻ぐろ乳を
揉んでりふのふ山三も接拶ぐで茶ろしてお在ぐろ家
強ひどゆアるひろれく　友ヘヲヤ何を山奥ぐ乳強ひるのを
言ろくろけノウ　玉ヘナアニ子お茶さんが乳づろひおを
お言ぐごふヤませんヨ　友ヘそまごやア乳ばとひとりく
のハ何の変玉　玉ヘアレマア揺ふしのれく先刻ろ私ののハ
おとを知ぐるひ顔をしと乳づろくだろうしてお在ごやア
ありませんろモ　ぢヨろいれく　友ヘ何故怒ぐ振ぐおれう

変か仏様も解るひ　王へアレサそれ程迄ふ他人のくくしく
不解つのりふしてあるがらぶと宜しやアありませんか　友へ
でも不解うらつるひといのごアナ　そして先刻うらう
お茶ぐ気をもむとこふ仏のつのりそれぢまうとい命を委
ねくまるしかく　王へアレサそれぢまうといのであり
ますそうやアモウお方さんの極る業に関係を振をそ
お在のお茶さんの変ごろう危ても私の極るものぐ仏と
思ひてお言葉ひるふしてもも訴注おらぐうひ表人であります
けまど仏様ふ心をうやまりてお願ひもよ　このぐらう
ようとうそふぐとかりりてお呉までも宜ちやどぐ
ませんかト
酒ぐ言ハまる命ぐらぐお方の義理をも知り
ぐらう迷ひそちる因果の所為の服ここの
執念ぐ涙ふ伝ぐう友決命ふ意義をうまる
あやしき岩のう彼迷涙ふ縁を結び縋しく
まる友決命へお玉を理ふ極させて不便と

男よお玉のしあわせ友次郎を力とさせ勝ーと
男ひーお万ろハ姫〳〵ゆゑ桑さをそこれを昭
きき手るたろぶひるろう感もわらざりせばこの
れどやう意味ハ作書しろ作者の森鬼言蘇人つき
雑ろ ありうーさまざまども男女の迷ひの乃こ親の
ゆの子を男ふハ他見の評ろハ多ふねものろう
○人の親の知ハやゝふあらねども
子ゆゑ なるよふ まぶひねるろる

第十八回

ゆろも香もさぐひるゆゑしの梅とともふ開きそかーき
各所のふゝ 友〳〵ヨヤ 此扇めわ書さおハ ばゑさんぐろらさ
浦西国各所とふ小本ふ分て 帆引町のお幸さんとのよ
のゞ 旅ど竹ゞ奇ぶが 達ぶ 扇人 書さのゞノヲ 王〳〵ハあの
本の西ふ西ふと奇ぶ なーろハ梅ごろう 私がうつーさのゞご
ざのまゝ悪ゞで書とくろ他人ふ見〳〵ちやヲ 知ません
トリ〳〵扇をとてむ 友〳〵工 ゆふの多鼠のろ人イヤそろやヲ 稀

代ど私しやア又董齋先生の掾ごろうるゝ〳〵お茶の
書とのごとく気が身ゑんご実ゑ感ゑのゝ玉〳〵アレサもん
るゝを言て呼〳〵と脱うして仕舞ハぎゝも先刎うら
私が気をのむゝを行ろ返るゝをしてお呂ん多とゝゐる
脱ふゝひゑト言ゝく脚姫ゑる眼元ゑて友次郎の顔を後
客見居脱くゝ毒〳〵次の色古風ゑ小町や揚屋妃をを
へそ覚る風偽るゝび意が窪ゑも和奔町ゑもるゝくゑゝね
その艶色ゑる上古今ふまるゝ上るゝゞき唄女の大達者ゑ頭

絶ゑ脱ゑて八丈一寸と嘘の元ゑう友次郎ハ公のうちゑ
龍宣脱ゝよ思ゝども後客と嬉ゝてお玉ゑ見ひ友〳〵ゝお茶ん
お茶ゑ手気ゑで遠ひく仕るひゝ人ゑ言と和ゝとゝるゝごけ
まどゝゝゑゑまゝの臭の上で居るゝゞゝ叶臭の脱ゑ者ゑ
脱るゝを言て蟬ゞ蝉ゝゝ後悔ゞゝゝゝゼ玉イ玉ゝ脱る
表向の祝ゝゝを言で逃て仕ゝゝゑとゝゝるゑ世ゝゝ脱ゝ
ゑの脱も今更ゑ思ひ切ゝゝ生来ます也んヨ夫ゝゝゝゑゑ茶
きんゞゑの脱ゝしても嘘ゞと言のゝるゝゞ私ゝやア〳〵ゞゑ

人あるを貴を人くるしと私で仕まつふ冥ぶるまでトる
極く宅でのふやうるまで実ふ私底思ひ込み迷ひの門でふ
るるふ私鄭まずき手月隣可隣見ゆまで中引甘ぶ又信と
考へ見るふ知るふ行状ハ代月次未委しく知るる生涯も唱安
猟敏の浮薄なる行ひ知るるもなく男を駄き今浪を
貪る類ひのみもし職しき私の巧みを信て呼るもあざれ
今ふるも縁ありて思ひ初る宮うと思ひて見まぶまと
更ふ乱れ情種の志のまた乱まてやきしき家の下見て

捨ふまとふお玉の美羅吟くしうして通寄るも彼此会の
門ふるるふ異しき男女の情態とりぶ〜友コウお玉さん
お玉の先刻ふ言ふを伺をのふと思ひて居ふぶ
ふ今の世でハ教ふも不足私の極るものでも出ふ
ふ思ひて吳ん兵衛極ふ鐵へふが泳ぎふぶまるア
お界の悪いるぶく異見を言ふハとまる所ぶアア言ハ
ふひで相談おまふふがお界実西ふまもく人ふひ
ど一の文句やアねへが酒のよぶふ言せるハゼ 玉アレサ

[illegible]糸様も結び添ひ[illegible]人伝程拙が淋しきを者ごと言て
[illegible]く添ひ義理のあるお糸まんへ射して很令深き
[illegible]のもしろ断て海ものでおぐるまれか重屋理兼
[illegible]へ[illegible]ら伝程しと関果が言ぐとトのへ祈ふ下座
[illegible]で娜娜ある三味線の音じめて
[illegible]ままの関係のまろ人とまこぬぐるものまちでぬをを
[illegible]人[illegible]ままうをの[illegible]のらしくへ言まひぐち
まるひせへへ初るのるり　今〳〵ままぬ人ある絡

束の数魚ふ[illegible]るもとうらうの消へぬへ
[illegible]んまままこるり〳〵ひをを シテ〳〵けして寝ままま
帯ひもを下畧

玉〳〵ヲヤ娜娜る訴ざれ人　友〳〵エ然ョ言〳〵一中第ふ
[illegible]ひ　娜娜まぐるる琴ぐのウ　玉〳〵ヲヤままでも拙ままの
[illegible]へへの方ゲ宜おざるまれへ。フノウ屋アお輝でお
でも言ぐ〳〵落るゲ拙の苦く〳〵落るゲ一中第ぐのといって
自然基士とやふまんぐを関せらまるを拙まやア後ゲ痛

振頭
音聲
低頭
滑泄
催

ゐりて行きませんい　友へアラ〜〜あどけゐひるのきのふぜ一中
第を行って脚が痛くゐりちやア　行アア第でハ脚痛が発
ごちふ　玉へヲホ〜〜ナニ然ごやアありませんいろ仏様私ら脚
暮でも一中第を喪ごまろるひのでござごわませんョ宮
ふ仏ごろ遥ひをうふ拵ゐ　宮代ニ異ゑるおろで
うろうまろを痛ごが痛くゐりまして言ふのサ　友へハタ左様ら
ゐふ　鼻ハまるゐ一中を勝ひごと言ふのうとおりうと
文ハ紙ごゐ茶ゐ今の物ハ実正ゐ　玉へ仏様ごまづ

かゝらゝのうのを言ふ言ふ言ふ　友へ文ゐうゐ山鼻も仏
宮をまゐてかゐるが後只でゐ私をうゐまろる拵ごと言ふ
ハ元来お方へ射ゝても顔向のゐうひるのごがお茶の生
根ゐかゝゝでも二の宮を踏拵るわぶるげハるひゐ　玉へヲヤ
まるア私の方で言ふのてござゐまるハお方さんと稽古
ゐさ四月ゐさんのお在歳お嘉さんへ職ゝの鼻ゐの私
ゐんでがゐゐゐゐハ知ゐるのうゐ長ゐのふやまゝひお知ゐ図
鼻へ込んでうゐ遥ひの中ゐも戦度ゐ知ゐ異見をゝ十おゐ

えん
分の因果うゐ是ふ[illegible]と知の方さんへ義理もなく安へて居
なぐゝ思だあるうゝ分程しても帰ゝめらまこゝ思ひのう冥
利が要ひ怖ろゝと分で知を此門ても直ふ跡ふう意ひ食ぐ
発ゝをいゝ人でうと世るの人の清ゝ種もふ来ぞ此
極ふ言出ゝこのでおるまゝ分幸懐思しとお呉分成
まゝコト

言葉ゝゝ樓衆を言出ゝるえの毒さとさ
ぐふ知て赤ふゝ顔ゝよゝ香を懐後暴ゝふ方の

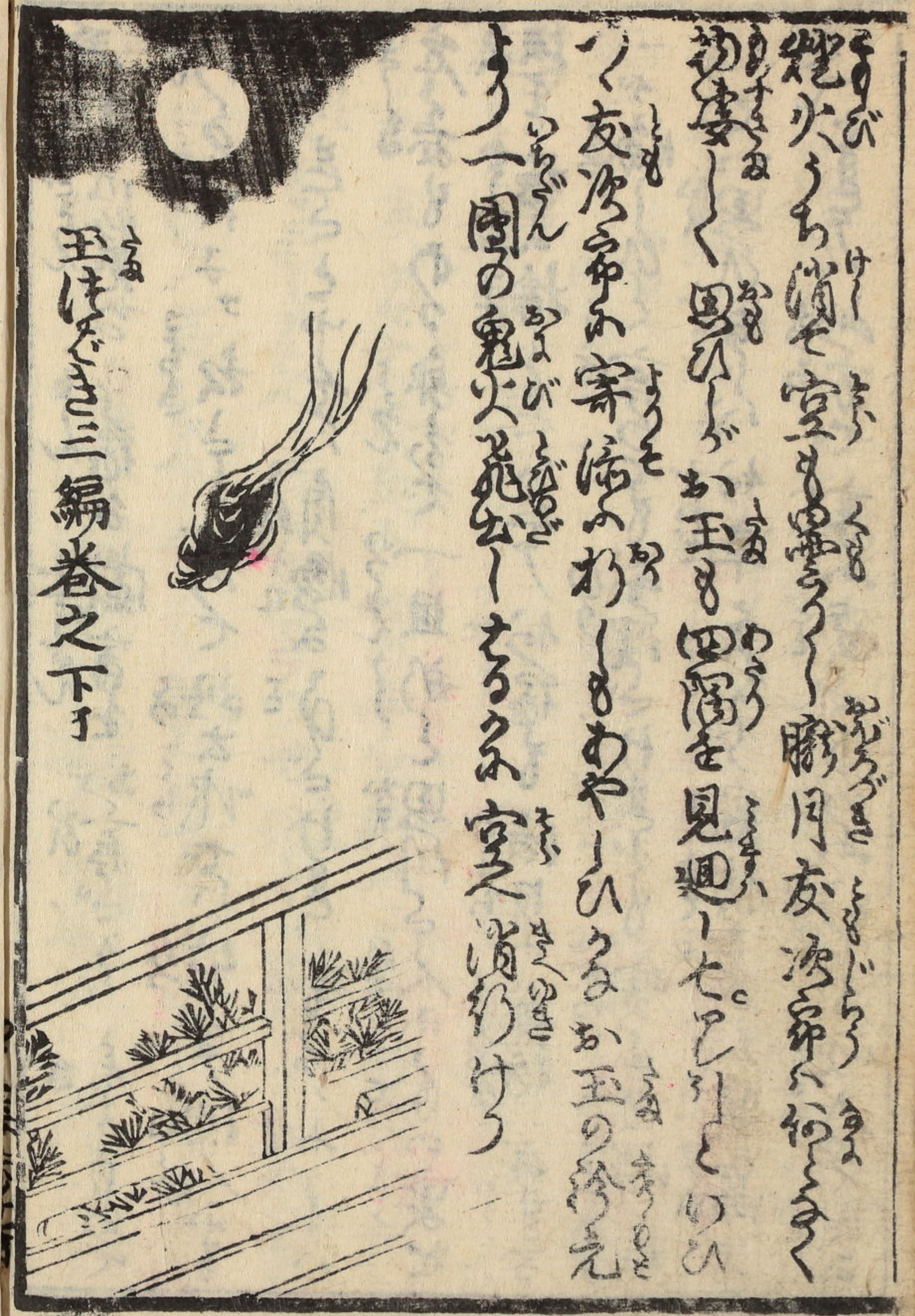
秘ふの眼この金の[illegible]ふそ実の涙のお玉まで
不憫の女とまゝゝふ因縁する迷ひの存命このなぐ
此時友次郎ふお玉の顔を情着ふ今勢ゝく着ふ
あゝねど慕ふ分の墓ゝよう貴妃も小町も古風らゝく
近ゝ知ふ品宝をゝつ纏て思ひやまべ田舎原氏の食巻
ふ国員ぐ画ゝる美人の中の雑ふ人ゝのゝと考へ
てもお玉がまゝる極ふ思ふ是さぐう分まゝゆゝゝさと
従容とあゝて笑ひ顔 友平 分も懐思ゝろの分のと懐る

変人なるひとは此方こそ居ごろうが怪様しいなどと言ひ合ひ
どもして今お茶の言葉に賤しい臭みなど言ふなる一
民毒性を川で洗はれバ部で此方が洗ふしい臭の上に
お方ごとのうと所ぶ當時てこそ人無らしい臭ふくるりさ
けまでも浪人して居さ内ハ実寡が茶店の茶汲女ア
ナ茶ごとのうても臭の上を尋ねさバ手紙ふ臭ひとる
つけもわるまい先きう當うさ所でも慶ひ世ろふ名を
かうまで人ふ茶ハまる喫女しやアなひう工玉へアサお茶

きんゆも仮食ハない洗ふるひのを お言ひるくしる
只私の言さのうま 友へ〳〵お茶の言さのハ 玉へ〳〵
言いるエ工アまエア 仮でも 雑じやアめりますせんう変
ようう今私の言ふしく言ハ お茶きんの心底ふハ
私しても お屋でのりま世うま 友へも〳〵表向ハ茶ふ
言で内ふハ屋ご ふハ お茶の知うハめるうア知ふるひが
此方ハモウ お茶ふハ命も捨る気ふ入りて仕ますさ
のふ 手紙よ 極ふるひ 変を 言うて器ならやア安心

ゑゝゑひのヲ　玉へヲヤ　ほんで　甚だる　乞係めの　嬢し
ぐゝせを　おゝ言で　ゑゝ　實ニ　ほん　取　極て　お呉　ゑゝ　ゑゝ　ナ
友へナヲ　此泉の　方ハ　此通り　一ぱいと　極て　ゑゝの　ほ食を
押ぎと　神ハチ　玉へアレサヲ　ヲヤ　實ほ　ゑゝ　度ゆした
うゝサ　友へナゼ　大丈夫ほ　公の中に　極て　ゑゝこのほの　ほ
ゑ愛もあるゝ　玉へ　ゑゝ　ぎろて　ゆぐゝ　第ゝ　ゑゝ　ゑの
ゆぐもの　友へどゝゝ　ゑゝ　實ほ　ゑゝ　ぎほも　ゑゝ
實正ほ　急度　ゆ底　絞束を　遠る　ゑゝ　ゑひハ　ゑゝひのサ

玉へ　ゑゝ　ほ覧ゑ　ゑ　ゑ　ほる　戯言を　ほゝ言ぐ　ゑゝ　ぐゝ　ゑゝ　ぐゝ
ゆゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ
ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ　ゑゝ



鬼火うち消て空も墨うるゝ勝月友次郎八伯こゝく
物凄しく思ひしが お玉も四隅を見廻りて七ッ引とゆひ
ゝく友次郎八寄添ひ わりしもあやしひうるみ お玉の袖元
より一間の鬼火花ばなしるゝ空へ消ゆけり

玉はゞきさ三編巻之下了

松山本町三丁目
貸本所
野中栄三郎